筑波大学リハビリテーション研究,6(1),84-85,1997.

〔公開講演会報告〕

障害者・高齢者の自立と介護
―在宅ケアとボランティアの関連を通して―

講師　佐　藤　登　美（札幌医科大学教授）

1　なぜ、ボランティアを始めたのか

★　動機と活動内容

昭和55年から56年頃、臨床では、老人の患者が目に見えて増えてきた。病気は治らない、病院に戻ってくる、ずっと入院して亡くなるといった状況に限界を感じた。昭和58年に老人医療費の制度が変わり、病院は老人患者を退院させたい、しかし、嫁は家にひきとりたくないという問題が生じた。何かやらなければ、と看護職の仲間が集まり計画を立てたが、考えが合わなくて空中分解した。しばらく、そのようなことはやるまいと思っていたが、そのうち、学習会が始まり、キーワードを「あいだがら」として活動を始めるようになった。

「地域にこういうコミュニティケアシステムがあったらいいな」という発想で、B 4版の冊子を作った。このプランの中で、やれるところからやっていこうということで、小さな介護教室を実施することにした。介護の相談を始めた。会員がお金を積んでオマルを買うことなどにとても新鮮さを感じた。「あいだがらづくりの会」の会報も作った。病院の白衣やキャップをつけた看護婦でなく、Tシャツ・Gパンの看護婦が訪問看護を続けた。さまざまな困難を乗り越え、だんだん評価されるようになってきた。

2　ボランティア活動を通して見えてきたもの

★　外からみた自分たちの姿

看護職のもつ体質は、健康至上主義、集団凝集性の高さ、自己表現のまずしさ…などで、TシャツとGパンでかいだ自分たちの匂いだった。

★　住民意識や社会的な諸問題

住民のニーズはつましいものである。年金をため、自衛しているのである。住民が野放図にニーズをつきつけてくることはない。また、現代社会は、人間関係が薄くなってきたという問題があることが実態としてわかった。

3　ケアをなかだちとするかかわり
（訪問介護事例から）

★　病院から帰ってきて、廊下で椅子に縛られているおじいちゃんの家に行って～

脳梗塞、片マヒ、言語障害の80歳の男性、50代半ばの嫁が主たる介護者。地方の典型的な農家の構造の家に住んでいた。

嫁が仕事をしている間、おじいちゃんは手を縛られていた。そうしないと、オムツに手を入れ、便をいじったりするからである。ボランティアが訪れる日は、家の掃除をして、病人の体を綺麗にして待っているのがほとんどのところである。つまり、ボランティアがくると、嫁の仕事が増える。だから、来てくれて有り難うはなかった。お節介な存在である。しかし、「今日もオムツに手をつっこんでいるのかなあ」と思うと「行かなくては」という気分になる。相手（嫁）のことを考えるとはた迷惑の様子であった。

おじいちゃんの指を見ると、黄色になっていた。便いじりである。翌日、摘便（指で便をかきだすこと）をした。おじいちゃんはすっきりした様子で、よい表情をして笑った。便がたまって、苦しくなっていたのだ。だれもいないのでどうしようもなく、ついついオムツに手を入れていたのであった。しかし、嫁は、ボランティアに向かって、「こんな状態で返すなんて…」「看護婦だったら、もっと病院できちんと看護したら…」といったことを言った。戸をピシャと閉められた。

ある日、嫁が「オイの話も聴いてくれ」と、つらくあたられた姑のこと、息子のことなどを、鉄砲玉のように話し続けた。ただ、聴くだけだった。でも、その後、嫁の様子が少しずつ変化していった。

年末の12月27日、風呂に入れた。嫁もだんだん拒否的でなくなってきて、嫁と三人で、入れた。おじいちゃんはとてもいい顔をしていた。風呂から上がると、これまでの汚れた臭いふとんでなく、きれいなふとんが敷かれていた。嫁は少し恥ずかしそうな様子だった。

1月11日、ボランティアの例会を福祉文化会館で開

いていたところへ、電話があった。嫁からだった。おじいちゃんが昨日亡くなり、おだやかな死に顔だったという。嫁は、介護が苦にならなくなり、正月は家族で過ごしたと話した。

後日、嫁は、丈の長いてっぽうゆりを一束抱いて来られた。亡くなる2～3日前、じいさんと気持ちが通じたと嫁は語った。その時、ボランティアの17名が全員でこの話を聞き、しんしんと温かくと、うれしさでいっぱいになった。嫁の涙と率直な表現に心を打たれ、奥深いところからこみ上げるものを感じた。これが人間なのだと思った。オニのような嫁がこんに変わる。変てたのはおじいさん。生活の全てを他人にゆだねざるを得ないおじいさんは、嫁のかたくなな怨念とか、確執とか、そういうものを解いていったのだ。花と涙を前に、「これはすごい！」と思った。

看護がもっている力とは、関係を作り治す力なのである。

4　嫁さんの態度の変化を追うと

★　5つの段階

第Ⅰ段階

自分だけがめんどうをみているところへお節介のボランティアが入る段階

第Ⅱ段階

自分のやり方に疑問を感じる段階

第Ⅲ段階

いままでの苦労を打ち明ける時期

第Ⅳ段階

相手に関心を持ちはじめ、前から気になっていることをやり始める時期

第Ⅴ段階

相手の気持ちがわかるようになる。他者との関係に学ぶ。

ボランティアの存在と高齢者の自立について

★ボランティアというおせっかいの侵入によって、おじいさんが生活の全てをゆだねている嫁を変えたのである。嫁も人間として矯正されたのである。

★自立を考えるには、じゃがいもがよい例である。いろいろな形があって、虫がくっていて、ところどころ皮が剝けていたりしても、そのままの形である。自然はふぞろいなのである。

★人との関係で成り立つ。嫁をこんなステキな嫁に成しえた。ゆるやかに考えてよく、一般化できない。関係の中で成り立っていたのである。

講師の講演は、ユーモアにあふれ、軽妙な語り口であったが、聴衆のこころには強烈な何かが残った。会場には、涙を拭く姿もみられた。

フロアからは次のような質問があった。

Q神奈川のろうあセンターのポスターを見て、手話通訳つきとのことで参加した。介護保険のことなどを勉強しようと思ってきた。

Aボランティアは形態的なものに縛られたり、基準をもっているものではない。行政の補完的なものや労働の報酬を要するものでもない、労働原理である。ケアが普遍的に広がって当たり前とするように、どう貢献できるかというところ。

Q今後、ボランティアをコーディネートする機関はどこが適当か。

Aボランティアは自由な意思が、固定化した基準に、インパクトを与える存在と考えている。したがって、介護保険などのボランティアの構想には解離がある。箱に揃えて入るものではなく、「Mサイズにそろっていることがいかにおかしいか」ということにボランティアの意義があると考えている。

（リハビリテーションコース　守田孝恵）